令和6年度　学習分析事業　改善計画シート　三原市立久井中学校

【別紙】

1．本年度の結果

①学力定着分析　NRT　偏差値平均（全国を50とする）

		国語	社会	数学	理科	英語	全体
1年	前年度結果 偏差値平均						
	本年度結果 偏差値平均	41.7	42.7	42.4	41.5	45.7	42.5
2年	前年度結果 偏差値平均	54.0	51.1	52.1	55.3	52.4	53.0
	本年度結果 偏差値平均	51.1	49.3	49.9	49.7	51.4	50.3
3年	前年度結果 偏差値平均	46.7	46.1	47.8	47.1	52.6	48.1
	本年度結果 偏差値平均	47.2	45.8	46.6	47.2	49.9	47.4
全体	前年度結果 偏差値平均	50.4	48.6	50.0	51.2	52.5	50.6
	本年度結果 偏差値平均	47.6	46.5	47.1	46.9	49.6	47.4

②全国学力・学習状況調査　正答率平均（第3学年対象）

教科	国語	数学	英語
前年度結果 （対県比）	74 （106）	62 （122）	46 （101）
本年度結果 （対県比）	57 （98）	55 （106）	

2　令和5年度について

①調査から明らかになった課題

【年度当初の学力について】（NRTの全国比との比較分析・各教科で全国平均よりも最も低い項目を挙げると）
●国語科では、1年生が「目的に応じて話の内容をとらえる」（53.9%）、2年生が「敬語を正しく使い話す」（41.9%）、3年生が「情報の扱い方・敬語等」（50.6%）の正答率が低かった。
●社会科では、1年生が「国際連合のしくみと働き」（67.6%）、2年生が「世界の古代文明と原始時代の日本」（37.1%）、3年生が「江戸時代の産業の発展や文化」（46.7%）の正答率が低かった。
●数学では、1年生が「平面図形」（45.9%）、2年生が「比例と反比例」（38.1%）、3年生が「三角形の合同、証明、図形の性質」（57.3%）の正答率が低かった。
●理科では、1年生が「電気の働きと利用」（64.2%）、2年生が「動物のなかま」（60.0%）、3年生が「電流の性質と働き」（51.5%）の正答率が低かった。
●英語科では、1年生が「文字や語などを聞き取ること」（79.8%）、2年生が「長文の概要や要点を読み取る」（47.4%）、3年生が「基本的な単語や英文を書く」（52.3%）の正答率が低かった。

【年度当初の学力について】（全国学力・学習状況調査をうけて）
○国語科、数学科、英語科の3教科全てにおいて県平均を上回ることができている。
●国語科では、「二つの文章に共通する表現の効果を説明したものとして適切なものを選択する」（観点を明確にして文章を比較し、表現の効果について考えることができるかどうかをみる）問題の正答率が(47.6)で全国正答率(63.0)と最も差があり、全問題の中でも一番正答率が低かった。
●数学科では、「空間における平面が1つに決まる場合について、正しい記述を選ぶ」（空間における平面が同一直線上にない3点で決定されることを理解しているかどうかをみる）問題の正答率が(19.0)で、全国正答率（30.4）と最も差があり、全問題の中でも一番正答率が低かった。
●英語科では、「バーベキューパーティーについての説明を聞き、質問の答えとして最も適切なものを選択する」（日常的な話題について、自分の置かれた状況などから判断して、必要な情報を聞き取ることができるかどうかをみる）問題の正答率が(17.4)で、全国正答率（41.2）と最も差があり、全問題の中でも一番正答率が低かった。

②課題改善に向けた学校組織全体の重点目標・取組

重点目標　（何を、どの程度達成するか）	達成のための具体的取組　（どのようにして）	スケジュール	検証の指標・目標
【授業改善を通した学力・学習意欲の向上】 ○全教諭が自由進度学習などの学びの選択肢と自己決定できる授業を行う。 ○全教科で生活と関連付け、学びの必然性を感じさせる課題設定をする。	①全体研修による目指す授業の共有、学力向上における年間スケジュールの共有を全教諭で実施 ②研究授業を活用しながら、必然性のある課題設定のもと、学びの選択肢と自己決定ができる場をつくり、それが有効であったかを授業評価シート等で協議する。 ③学力調査問題における正答率の低い問題やQ-Uの結果を分析してアシストシートの活用や実施時期等の対策を考える。 ④学力調査問題の類似問題アシストシートの実施	①5月 ②6月～12月 ③8月 ④2月	・Q-U2回目の学習意欲の数値 （全学級で全国得点+1以上） ・作成した類似問題（テスト）の正答率　（国語、社会、数学、理科、英語、全学級80%以上）
【学級・学習集団づくり】 ○一人一人に役割をもたせ、主体性をもって計画・活動・振り返りをさせるような活動に取り組む場をつくる。 ○全学級において、生徒との定期的な教育相談・面談を実施し、教職員で共有できるように記録する。	①定期的（1学期に1回以上）に行う学級ごとの教育相談・面談 ②Q-Uによる実態把握と面談内容をもとに改善計画の立案 ③第2回Q-Uの実施・生徒評価アンケートの実施 ④Q-Uの結果分析 （成果と課題をまとめ、来年度の方針を決める）	①4月、6月、12月、2月 ②8月 ③12月 ④2月	・Q-U2回目の一次支援の数値の向上　（全学年で1回目以上）

3　令和6年度について

①調査から明らかになった課題

【学力調査について】
（NRTをうけて）
●国語科では、1年生が「考えや感想をまとめ伝え合う 」（24.9%）、2年生が「古典・漢字の読み・品詞の理解等」（47.6%）、3年生が「感想や考えをまとめ伝え合う」（28.6%）の正答率が低かった。
●社会科では、1年生が「都道府県の名称と位置」（36.0%）、2年生が「歴史の流れと時代区分」（33.6%）、3年生が「地図の見方と身近な地域」（33.3%）の正答率が低かった。
●数学科では、1年生が「平面図形」（32.2%）、2年生が「比例と反比例」（45.91%）、3年生が「1次関数」（40.4%）の正答率が低かった。
●理科では、1年生が「三日月と太陽の位置」（14.2%）、2年生が「質量パーセント濃度」（26.3%）、3年生が「反応する酸素の質量」（16.7%）の正答率が低かった。
●英語科では、1年生が「会話や説明の概要を聞くこと」（31.1%）、2年生が「質問やアナウンスを聞き、応じる」（57.5%）、3年生が「テーマに沿ってスピーチをする」（57.8%）の正答率が低かった。
●1年生においては、教科総合の偏差値平均が42.5と、統計的に全国の水準と比べてどの教科も低い。全体的に学力の定着が不十分である。

（全国学力・学習状況調査をうけて）
●国語科では、 言葉の特徴や使い方に関する事項の正答率が51.0%であり、全国の平均正答率よりも8.2ポイントも下回っているため、特に課題があることが分かる。
●数学科では、他の領域は全国の平均正答率よりも正答率が全て上回っているにも関わらず、図形の領域の正答率が38.2%であり、全国の平均正答率よりも2.1ポイント下回っているため、この領域に特に課題があることが分かる。

②課題改善に向けた学校組織全体の重点取組等

重点取組上記課題を踏まえたもの）	具体的方策(継続して取り組めるもの）	検証指標及び時期
【学力向上ついて】 ・基礎・基本の定着 ・感想や考えをまとめて伝え合う ・文章の読み取り、聞き取り ・平面図形や一次関数の確実な理解	①全学年全教科等でのR80の実施（必須） ②実力テストや生徒アンケートに基づく授業改善 ③（1年生）実態に合わせた目標設定を全教科全職員で実施する。 ④生徒理解・C層の生徒への支援の観点から研究授業の参観と事後協議を実施する。 ⑤学習機会の提供について（自習室の開設）	○実力テスト（年間2回実施）の平均点県平均以上（10月と1月）
【学級・学習集団づくりについて】□ ・誰もが安心、安全に過ごすことができる居場所づくり ・生徒が主体となった活動や絆づくり ・自己肯定感の向上 ・学習規律・学習環境の整備	①子供たちが対話を通して、考えや表現を向上させる場の設定 ②SSRの充実・QU分析に基づく生徒支援 ③生徒会を中心とした生徒主体の行事の企画運営 ④小中連携による授業研究	○生徒アンケート「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり広げたりすることができていますか」の肯定的評価の割合80%以上（9月と12月）